

茶研究 最前線

～県立大から～

●●7

静岡県の茶処（せや）に、がんによる死亡率が低く、例えば胃がんによる男性の死亡率が全国平均の約5分の1の地区があり、緑茶に抗がん作用があるらしいことが25年ほど前に報告されて一躍注目を集めた。

緑茶が抗がん作用をあらわすメカニズムの主なものとして、アポトーシス誘導作用がある。アポトーシスとは自然に備わっている「細胞の自死」で、生理的な現象である。抗がん剤の中にはアポトーシスを誘導してがん細胞を死滅させるものがあり、緑茶に含まれるカテキンの一種EGCgにも同様の作用がある。

アゾキシメタンという薬

抗がん作用

「細胞の自死」を誘導

がん細胞を移植したマウス



②マウスの腹腔内にごん細胞を移植すると、15日後には増殖して腫瘍塊ができる①同時にスリンドクとEGCgを投与した場合は、腫瘍塊はあまり見られない(大石智一さん提供)

剤をラットに投与すると、大腸がんの前がん病変が起ころ。同時に抗炎症剤スリンドクとEGCgを投与すると、この前がん病変が著しく減少し、アポトーシスは約3倍になった。EGCg単独でもアポトーシスが2倍以上に増加した。また、マウス腹腔内にごん細胞を

移植すると、がん細胞が増殖するが、このときスリンドクとEGCgを投与すると、その増殖が著しく抑制された。

動物実験の多くで認められるこの抗がん作用が、ヒトに当てはまるかどうか？

最近の疫学調査研究では、緑茶が胃がん、前立腺がん、肝がんなどのリスクを減らしたとする報告もあり、臨床試験で前立腺がん予防に効果があったという論文もある。結論を出すにはまだ早いですが、緑茶の他の効能も考えると、あまり熱くないお茶をできるだけ多く飲むことは健康維持に役立つと思われる。

(伊勢村護・大学院生活健康科学研究科客員教授)